

者爲一生人、喜其多淳謹也、此亦謂疾者未熟知之人也、

〔梅園日記〕<sup>五</sup> 疱瘡忌貝

本朝醫談二編に、類聚符宣抄の、天平九年の太政官符を引て、廿日已後、若欲喫魚、先能煎炙、然後可食、但乾鰯、堅魚等之類、煎否皆良云々、本文に乾鰯の事あり、世疱瘡に貝類を忌とて、のしあはびを用ひざるは妄なり、痘毒目に入たるに、のしを黒焼にしてさす事、醫療羅合に見えたりとあり、慎言云、のしあはびを忌のみならず、すべての貝つ物を家の内へいれだにせぬ程にいめり、按ずるに、痘疹傳心録の諸藥性、口訣に、淡菜、味甘鹹、氣微寒、和肺氣、益腎氣、蛤蜊肉、性冷、煮食、潤五臟、止消渴、開胃殊功、牡蠣、味鹹寒、入腎經、消煩滿、化痰、凝固、精止汗、石決明、鹹平、入肝經、消障翳、點赤膜、また、外消散、治陰囊腫亮、大黃、牡蠣、錢各五、梢硝、錢二、右爲末、取田螺洗淨、以水活過一夜、取水調前末、塗腫處即愈、とあるを見て、貝つ物いまぬを知べし、考ふるに、是は蘇沈良方の、治痘瘡無癢の條に、瘡家按に、和板伊良子氏千之堂本、及び鮑氏知不足齋本、俱に瘡癩に作れり、今程氏六醴齋本に從へり、不可食、鷄鴨卵、食即時盲腫、子如卵色、其應如神、不可不戒也、幻々新書の、瘡疹愛護面目門に、熟雞鴨等卵、未有不損目者、雖瘡愈、宜數月不食、痘疹傳心録に、或恣食諸卵、害目など見えて、くひて目しひとなるは、雞鴨等の卵なり、卵をふるくはカヒコといへり、日本紀、萬葉集、遊仙窟、和名抄、類聚名義抄、字鏡集、平他字類抄、倭玉篇の卵、又日本皆カヒコ、とよめり、さるを中昔より、かひともいひしかば、後には貝とあやまりたるにや、卵をカヒといひしは、忠見集に、すもりこも出にけるかと見る時は、かひなき身さへうらやまれける、又能宣朝臣集に、物申につれなくのみ見ゆる女に、鳥の子をいつ、やるとてすにすめるみをわびつ、も鳥の子をいつかひ有と物をおもはむ、此外、後撰集、拾遺集、輔親卿集、蜻蛉日記、空穗物語、大和物語、古今六帖、源氏物語、保憲女集、金葉集、草根集等にあり、竹取物語のつばくらめのこやすがひも、燕卵なりと、河海に史記を引ていへり、近き頃ののものには、福津松鷗軒が鷹記、貞徳が油糟等に見えた